

2016.08.08：次世代育成調査特別委員会 本文

○菅原正和委員　私が気になったところが、22ページの下のほうに、地域にある連携したい組織ということで、そちらに、学校にはよく体育振興会があるかと思うのですけれども、ここに体育振興会という名目がないのがちょっと不思議だと思ったのですけれども。

○小岩孝子参考人　体育振興会もさっきの学校支援地域本部の委員になっていまして、一緒にやっています。運動会のときなども、そうです。

○菅原正和委員　あと、多分この地域っていろんな特性があって、タケノコとか、米とか野菜とか、いろいろな地域特性、特に郷土料理とかつくって、その地域を一生懸命発信しようということで、子供たちもいろんなことを体験すると、その中で一番というのが出てくるかと思うのですね。それによって自己肯定感が非常にアップしてくるような気がするのですけれども、そういうチャンスをどんどんふやす仕組みをつくっているのは、非常にいいなと私は感じたんだけれども、そういういろんなことを体験できる、その種類をふやさないと、自分が得意、不得意というのがいっぱい出てくるので、こういうのをいっぱいふやしていただければうれしいなと感じました。

○小岩孝子参考人　はい。そのようにしていきたいと思います。やっぱり地域柄、畑が多かったりするんで、子供たちが米をつくったりとか、耕す中で虫とかとも友達になったりして、そういうのも必要だなと思いますし、いろんな方たちとかかわって、いろんな人たちを見て、自分で将来を選んでほしいという思いでやっています。ありがとうございます。

○菅原正和委員　前回と今回を比べてみても、やはり人のすばらしさというのがまず一個出ているのではないかなと。地域を育てるときに、そういうリーダーがまずは必要だということを感じました。

ただし、そこをつなげるに当たって、学校と必ずきちんと話をしている。そこが一番みそだと思います。どうしても学校というのは、地域の人を受け入れがたいという門構えが多少あるので、それを打ち破るためには、やはり学校の先生のほうが地位が上だよ、私たちが下だよという感じでお話すると、何かそういうのもいいのかなと。地域のいろんな団体にしても、何にしても、長の人というのは結構上の立場で物を言うので、そういうときにでも下からおっしゃったほうが、地域連携って非常にうまくいくのかなと。そういうことを小岩さんとか、前回の住吉台の方もみんないろんなことで、そういうことをうまくやられているから、こういう地域連携がうまくいっているのかなと。

あと、一つ楽しいことを自分でやろうとか、それによって次のことをもっとやっという、いろんなことで膨らませていくという、その発想が非常にいいなと。

あと一つは、二つともそうなのだけれども、和太鼓という共通点があったんですよ。これって、なぜ太鼓なのかなとよくよく考えると、太鼓って、単純で誰でもできて、でも連携がで

きるというのが多分いい。それと、あと世代を越えて太鼓はずっとできていくので、多分それなのかなという感じはしました。ただ、予算的にこれもお金がかかるので、その予算がつくところは、そういうことができるかもしれないけれども、予算がないところはそれがなかなか難しいのかなと。

ただ、この自己肯定感が上がっていくということは、非常に皆さん努力しているということと同時に、子供にきちんと向き合っていて、きちんと子供目線でやっている。だから、多分小岩さんとか、この間の先生もそうだけれども、多分すごく子供がすがってくると思うんですね。すがってくるからこそ、そういうことができる。スーパーバイザーって、やっぱりそんな高い目線じゃなく、子供がすがってくるような人じゃないと、なかなか難しいのかなと。地域の中で今からどんどん進めていく場合に、成功事例ばかり参考にするのではなくて、地域の特化ということも必要だし、自分の特性ということも必要だから、まずその中でいい部分を学び、自分のことを出していければ、いろんなことで地域というのは育っていくのかなと。

人の協力をもらうためには、自分が一生懸命腰を折っていくのが一番ではないかと。私たちもそうやって腰を折って、一生懸命評価されると同じように、そういう感じになるのではないかと思いました。